うといふこと、是れである。（第五節完了）

雜　纂

瓜哇紀行（下）

文學博士　松本文三郎

五、千佛寺

（一）其構造

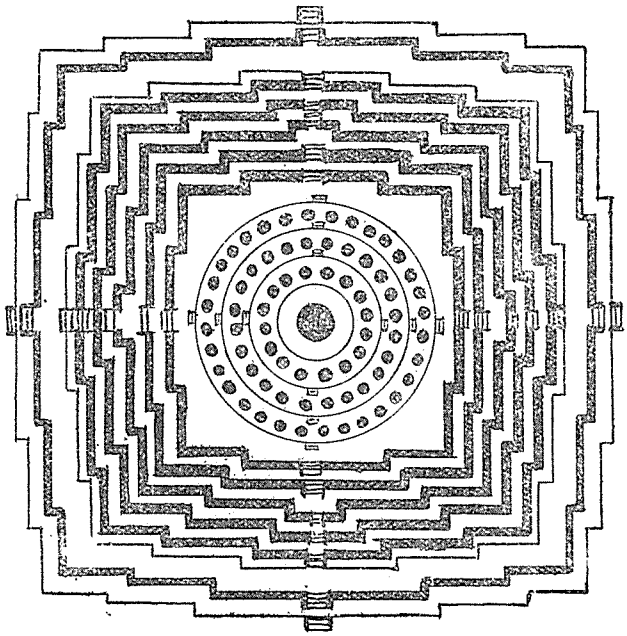
Tjandi Borobudur（又 Boroboedoer）卽ち千佛寺は余輩が今回瓜哇寄港の殆んど唯一目的地ともいふべき所である。千佛寺はジョクジャの北西、約十六哩の地にあり、ジョクジアよりスマランに至る汽車線路より少しく西に距つて居る。で若し汽車を利用するならばジョクジアより Moentilan に下車、更らに之より馬車を取らなければならぬ。寧ろ自働車の便利なるに如かぬ。自働車ならば往復各一時間、半日を費せば可なり詳細に觀察が出來る。千佛寺の傍には小ホテルもあり、數日に亙つて調査するには此に宿泊するを得、又日出日沒の時の美觀を味ふにも此に一泊するを好しとするのであるが、余輩の此に至つた時は、前にも一言

した如く日々降雨があり、到底此美觀に接するの望がなかつたのと、翌日は又早くジョクジアに歸らなければ他の方面の遊覽を果たし得ないので、遺憾ながら半日を此に費すことゝなし、二月四日澤部氏と共に午前七時ホテルを出で自働車を驅つて此に至つた。

千佛寺は、瓜哇に於ける、佛教と婆羅門教とを問はず、一切建築の中最も優秀なるものであり、印度文化の最盛期の製作に係るものであらうと思ふ。瓜哇の千佛寺を說くものは又常に東蒲西亞に於ける Angkor-Vat と之を比較するのである。余輩今回の旅行には遺憾ながら時日切迫の爲め東蒲西亞に寄港するを得なかつたから、詳細に此兩者を討論することは出來ないが、其製作年代から之をいへば、アンコル・ヴトは十三世紀の頃に成れるのであり、瓜哇千佛寺は更らに數百年古く、其彫術の美的價値亦彼は到底千佛寺のそれに及ばぬ

で印度以東南海諸國に於ける古代の美術的作品としては、恐らく瓜哇千佛寺を以て第一としなければならぬことゝ信ずる。で A. R. Wallace 氏も千佛寺を以て埃及の金字塔に比較し、埃及の大金字塔に費されたる勞力と技巧とは既に大なるものであるが、今之を以て瓜哇內地に於ける此寺院彫刻〔千佛寺〕に比し來れば、亦殆んど言ふに足らず」と迄賞讃されて居る。如何にも其建築の面積に於ては、彼ギセーの大金字塔と伯仲の間にあるが、彼にあつては唯切石を積上げたのみであり、此にあつては滿面精緻なる彫刻を施したのであるから其勞力の一層大なることは言ふを俟たず、其美的價値に於ても到底同日に語るを得ないのである。

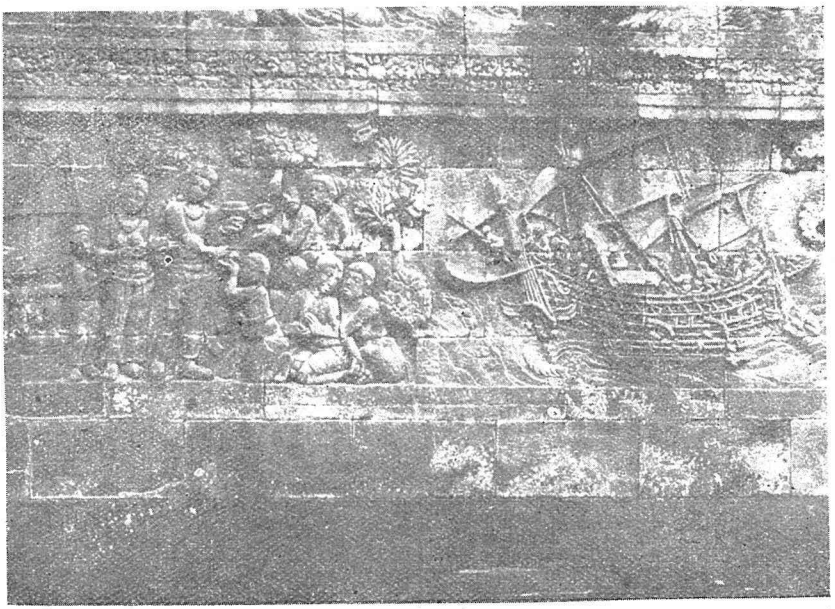
千佛寺といつても嚴密の意義に於ては、寺ではなく、印度の率堵波卽ち塔の變態である。が此には俗稱に從ひ姑らく寺といつて置く。此寺は一小丘を利用し造つたもので、全部は九層から成立ち



千佛寺平面圖

我邦の九重の塔に相應するものであるが、其構造は全然同じくない。遠くからして之を望めば、城廓か寺院の如くにも見える。全部ラヴ石の切石を積上げ、其面に微細精巧なる彫刻を施してある。塔として之を見れば基礎の割合に高さが低く、(高と基礎との比は一と三、一七である。)餘り雄大なる感を生じない。勿論上部は地層の陷落したが爲め、稍其高を減じたともいふが、何れにしても今少しく高く天空に聳えたならば、更らに一層の美觀を添え得たことであらうと思ふ。切石と切石との間にはセメントの類を用ゐず、單に上層の石の下に臍を造り、下層の石の上部に穴を穿ち、之を嵌込むやうに出來て居る。彫刻には或は元と白堊を塗治し、彩色を施してあつたものかとも思ふが、今は其痕迹をも留めぬ。

寺卽ち塔は正方形の基礎の上に建つのであるが、圖に示す如く各邊何れも同樣ジックザックの曲



千佛寺周壁浮彫の一部

線をなして居る。元來此塔は何れの部分も直線から成立するに關はらず、全體としては成るべく圓形に近らしめんと企てたものらしい。此ジックザックの曲折を設けたのも亦全く此精神に本づくことは、仔細に其各部を研究すれば容易に判る。底邊の直經は約六十一間餘、四面の中央よりしては、各頂上に通ずる昇降の階段が設けらる。基礎より以上の五層は何れも同一の構造であつて、唯上部に昇るに隨ひ、次第に其面積が狹小となるのみである。而して其一層毎に高約一丈、厚四尺餘の壁を以て圍繞せらる。壁の內部は勿論土であるが、其面には前に一言した如くラヴの切石を以つて疊み、全面一段或は二段に佛傳、本生譚、佛菩薩像等を彫刻し、更らに空處を存せぬ。是れは一階より五階に至る迄同樣であるから、若し此等の彫刻面を一直線に並列せしむれば、長約三哩にも達すといふ。此等浮彫の數は總べて約二千といはれ、其

千佛寺周壁浮彫の一部

中今や多少毀損せられ、不明なるもの、缺損するものもあるが、尙ほ一千六百は明かに之を認め得らるゝといふ。吾人は之によつても此塔の建設者が、如何に一代の精力を傾注したかを知り得るのである。而して此塔が印度以東南海諸國の美術製作の中にあつて、嶄然頭角を顯はし、獨り其大と美とを誇り得る所以のものも亦全く此にあるのである。塔全體としての設計の不備も、亦之によつて善く償はるゝことが出來る。其彫法は頗る巧妙であり、顯はす所の人物は悉く印度的ならざるはない。彼等の何れも翹多後期の印度彫法の流を汲めることも一見疑を容れぬ。瓜哇各地に發見せらるゝ土人の彫刻とは遙かに異なつて居る所を以て見ば、其印度移住民の手に成れることも明かである。フーシェー氏は嘗て之を評して、「彼等の線は纖細にして力に乏しいが、其比例は善く調ひ其擧動は自然であり、態度亦變化に富む。彼等は

又能く透映の法を知る。……印度に於てすらも若し捷陀羅、アマラ―ヴチーベナーレス諸派に於ける少數の大作を除けば一として此極東の地を榮えたる佛教美術に勝れるものはない」(瓜哇の佛教美術）といつて居るが、此言は決して溢美とはいはれぬ。

浮彫の題目は主として佛傳、本生譚、其他佛典に顯はるゝ諸種の佛菩薩天龍鬼神の類であるが、此等は尙ほ未だ十分の研究を經たるものではない其意義の闡明せられざるものが多い。Pleyte の Die Buddhalegende in den Skulpturen des Tempels Bôrô budur や Foucher の「瓜哇に於ける佛教美術」(The Beginning of Buddhist Art. p. 205-269. Bulle in de l Ecole francais d'Extr. Orient. Vol. IX) 等に解說する所、亦唯僅かに其佛傳や本生譚の一部に過ぎないのである。が佛傳本生譚の類は第一階第二階に多く、上階に至るに從ひ、物語を題材としたものは少くなり、次第に佛菩薩乃至供養の像が多くなるのである。が特に注意すべきは、其第二階の一對には四臂又は六臂の觀音像や、經卷を手にせる文殊の像抔が顯はれ、又三階には三尊佛の像抔もある。此等によつて見ても此塔を製作した當時の瓜哇佛教の大乘教であつたことは疑ふべからざる事實のやうである。

彫刻の美術的價値に就いては今此に詳論するを得ないから、姑らく此に筆を擱き、更らに塔の構造に還つて之を述べやう。周壁の上部には龕が駢列し造られ、其類總べて四百三十二とも六とも稱せらる。而して此等の一々には等身大の佛坐像が安置せらるゝ。勿論現時其多くは既に毀損せられ、或は取去られては居るが、尙ほ多少は存する。傳ふる所によれば英人が始めて此塔を發掘して以來土地の好事家は爭ふて之を取去り、自家庭園の裝飾となし、和蘭兵は瓜哇戰爭の時此に駐屯し、佛像

の頭を射的となし、發火演習をもなし、且つ無知の小兒は佛頭を取り互に相投じて戲樂したともいふ。各階中央の昇口には、アーチが造られ元とは木若くは鐵の扉があつて之を開閉したものゝやうである。今は一つ存するものもない。が其左右のアーチの石には木を挿込んだとも思はるゝ穴が穿つてある參拜者は一階毎に上の周壁と下の周壁との間を歩むので、是れが所謂經行の途であり、此にも全部ラワの切石を疊み幅約六尺計ある。

第五段を昇り終ると稍開いた場所があり、之より以上は周壁を設けず又此迄の方形の基礎を變じて圓形となし、三段を設くる。而して其各階を繞つて約五尺の高を有する塞堵波を造り之を駢置し其中には各蓮華座上の佛坐像が安置してある。此等塔内の坐像は何れも製作特に勝り、石材もラワではなく、色の稍白い石(石灰石か)である。其製作から見れば彼浮彫よりも一層古いもので、印度毬多期の最盛期四五百年前後の作に係りしものではなからうかと思ふ。小塔の數は都合七十二あるが其中佛像の形式大小は何れも同一であり、唯其印相が異なつて居るのみである。即ち東方に面するものは降魔の印、南方に面するは與願の印、西方のは禪定の印、而して北方のは施無畏の印を結ぶ。で此第一は阿閦佛、第二は寶生第三は阿彌陀、第四は不空成就だといふ説もあるが、果して然るか否は不明である。又此小塔は宛も竹を編めるが如く菱形の穴を透彫にしてあ

千佛寺上部小塔内の佛

る。で吾人は能く其內部の佛像を拜し得るのである。斯かる塔の製作は瓜哇以外の國土には未だ曾て見ざる所である。

上の三段を昇り終ると、此に最後の塔が建つて居る。高約一丈二尺、底邊の直徑五丈五尺。中央には穴があつて深く全塔の底に迄達すといはるゝ此塔は之と密閉しておつたのであるが、一八七八年始めて其一方を破つて內部を檢した。此時には黃金の裝飾抔も發見せられたといふ。而して尙ほ此に一の奇なるは其內部土中には、未完成の佛像が一體埋藏せられてあることである。是れも其時には發掘し調査したのであるが、當時の記錄によると其頭部の毛髮、兩耳、手、足、臺等は完成されて居ない。其後此像は再び此に埋藏せられ、舊の如く肩迄土を覆ひ、唯頭部だけを地上に顯はしてある。元來此塔は全塔の更も重要なる地位にあるのであるから、何が故に斯かる半成の像を此に

埋藏したかに關し、諸種附會の說が泰西學者の間に行はれた。勿論何れも信ずるに足らざるのである。でフーシエー氏は此等の說を列擧し、更らに一つ推測說を提出していふ、西域記抔によると昔時一婆羅門あつて佛陀伽耶に一精舍を造り、工人を招いて佛像を造らしめんとしたが、人の之に應ずるものがなかつた。時に一婆羅門あり、我善く佛妙相を圖寫せんと言ひ、精舍の戶を閉ぢ、其業に從事し、六月後門を開くべしと告げた。期に先つこと四日、衆人相集まり戶を開き見るに、佛像は儼然として存したが、「唯右乳上圖瑩未周」、而して工人は何處に行つたか更らに其形を顯はさぬで衆皆悲嘆したといふ。(西域記卷八)此像は卽ち彼を摹したので、是れが抑も未成の像を此に造つた所以ではなからうかといふのである。是れも誠に穿つた說ではあるが、西域記にすれば「右乳上圖瑩未周」とあるから、乳下の部分は旣に完成し

居たやうであるが、今此塔内に埋藏せらるゝ像を見れば（發掘當時撮影の寫眞は載せて前記フーシエー氏の著書中にある）、雷に乳上のみではなく其下部手足に至る迄何れも完成せられぬ。で是れは彼傳說とも勿論相合せぬ。依然として千古の謎である。

尙ほ千佛塔構造の說明を終るに望み一言しなければならぬことがある。此塔の構造は前に述べた如く頗る複雜で、印度に普通見る所や、支那に所謂雁塔抔と稱するものとは大に其趣を異にする。で果して其れが塔と稱すべきか否も一見不明であるが、併し其塔の一變態なることは何等疑を容るべき餘地を有せぬ。卽ら下部の五段は塔の臺座である。印度本來の窣堵波は基礎の上に覆鉢なるのドーム形のものが置かるゝのであるが、西北印度に於ては其基礎が非常に高くなり、之を方形となし、更らに三段又は五段に區分し、其周圍に佛像等を彫刻したのが最も普通である。千佛塔の下部の五段は卽ち之に相應するのである。但其れは更らに一層之を複雜にし、周壁を造り之に浮彫をなすことゝなつた。上の三段は彼覆鉢に相當する。但覆鉢にも階段を設け、尙ほ多數の小塔を排列したのは、一層意匠を凝らした所であらう。而して最上の塔は卽ち平頭以上の部分に當る。で此には佛像（舍利の代り）や黃金の裝飾物をも收めたものと思はる。して見れば大體に於て塔の元理に合したものであるが、其の各部分に於て一層技工を弄したものといはなければならぬ。而して斯かる技工を弄した塔は、印度其他の地方に於ても未だ曾て發見せざる所であるのを以て見れば、恐らく瓜哇移住の印度技術家の特に其新意匠を出したものかと推測せらる。此點からして論ずれば、瓜哇千佛塔は亦塔の歷史上にも一の注意すべき顯象であるといはなければならぬ。

(二)　建築時期

千佛寺製作の年代に就いては、元來此廣大なる建築中未だ何れにも題銘の發見せられざること、歷史傳說の極めて茫漠として捕捉し難きとにより現時何人も確として之を斷言し得ざるのである。で和蘭の Kern や Brandes 氏は紀元後八五〇乃至九〇〇年を以て其製作の時期となし、Brumund 氏は主として歷史上の根據により九世紀若くは八世紀の作となし Cabaton 氏亦之に同じ、Foucher 氏はアンコル・ヴトよりも約三百年若くは其以前に成れるものとなす。(アンコルの成れるは約十二世紀前後であるから、此說も亦九世紀若くは八世紀頃を以て千佛寺製作の年代と認めたものと思はる)尙ほ Fergusson 氏は其の建築上の樣式からして、此等の說よりも更らに一世紀溯るべきものたることは疑なき事實であるといふ。氏の說によれば「其(千佛寺)彫刻の樣式特性は、アジャンターの最も新しい石窟(例えば第二十六番の如き)や西方 Ghats に於けるそれと殆んど同じく、彼等は宛も同一手に成れるにあらずやとも思はるゝのであるから、此等兩者の製作年代に於て甚だしき間隔の存することを考へ得ない。で若し余輩が彼石窟を以て第七世紀の前半に成れるものとして大いに誤なしとせば、爪哇の此遺跡は遲くも同世紀の後半に造られたものとしなければならぬ」といふ。Fergnsson 氏の說は頗る可能である。併しながら同一地方に於てならば建築樣式の變化は略其の製作年代を定むるに足るが、印度と爪哇との如き幾千哩を距てた國土に於ては、假令ひ後者が全然前者に依るものとしても、其時期は必らずしも常に精確には連續せぬ。のみならず印度の建築も其地方によつて多少の變化があり、爪哇のは果して何れの地方から傳來したかも尙ほ頗る不明なるに於

ては尙更である。併し斯かる大建築が造らるゝには、同島の佛敎信仰の最も盛大であつた時期でなくてはならぬことは論を俟たぬ。然らば爪哇島の佛敎の何時輸入せられ、如何なる時期に最も隆盛となつたかを究むるのは、其建築や彫像の樣式を比較研究すると同樣必要なる事件であつて、此兩者を併せ考うれば千佛寺建築の時期を推定するに於ても稗益する所少からぬことゝ信ずる。で余輩は此に先づ極めて貧弱なる材料からではあるが、爪哇に於ける佛敎傳來の狀況を概觀し、然る後其建築彫像の樣式に就いて聊か印度のそれと比較して見やうと思ふ。

前にも一言した如く爪哇の傳說によれば、Adi Sâka なるものが印度より移住し來つて全島を統一し、此に爪哇國なるものが建てられたといふのである。而して彼が Sâka 紀元を始めたとするので、之を以て紀元後一世紀の人とする。(Sâka 紀元元年は西曆紀元後七五年であるが、爪哇では七九年と變化したともいふ)。一體 Adi Sâka なるものは果して國王であつたか、宗敎家であつたか判らぬが、何れにしても若し果して當時印度から移住し來つたものであつたとすれば、其何人たるを問はず、之と共に宗敎をも輸入したことゝ思ふのみならず紀元一世紀頃の印度では佛敎が尙ほ社會に彌漫して居たのであるから、其宗敎も亦必らず佛敎であつたらうと推察せらるゝ。が若し佛敎の壓迫によつて異宗敎のものが移住したとすれば或は婆羅門敎徒であつたと考へられぬこともない併しながら元來 Sâka 紀元なるものは印度に始まり、同國に於ては最も廣く又最も長く行はれた紀元であり、決して爪哇に始まり印度に輸入せられたものではない。して見ると Adi Sâka なるものが爪哇に來り、此に其紀元を創めたといふのは、殆んど信ずべからざる附會の說たるを免れぬ。

是れは大ブハーラタ物語を爪哇語に翻譯し、而して其物語中の事實を爪哇に移したと同巧異曲の說である。特に adi とは第一、最初の義であるから、Âdi Sâka とは最初の Sâka 王の義に外ならぬ。卽ち其の神話的人物であつて、決して歷史的人物でないことも疑ない。ラッフルスの歷史には紀元後七世紀の頃印度グジャラトの王に Di Sâka 又は Diva Sâka と稱するものがある。是れが卽ち此に Adi Sâka と稱するものであらうかと疑をも起してあるが、余輩を以て見れば是れ亦何等謂なきことである。尙ほラッフルス氏等の傳ふる所によれば Tritista(又は Tritasfri) なるものが印度の宗敎藝術を爪哇に輸入したともいふ。而して一說には是れが卽ち Adi Sâka でさるともいひ、又一說には是れは紀元後三世紀頃のことであり、彼は佛敎徒であつたともいふ。Fergusson 氏は如何なる理由によつてか、之を以て婆羅門敎徒であらうとなし、宣敎の爲め爪哇に來たものであるが彼は非建築的の人種であつたらうといふ。併し是れも單に傳說であつて果して歷史的事實であつたか否も明かならぬ。況んや其佛敎徒たるか婆羅門敎徒たるかは、殆んど捕捉する所ないのである。

紀元後四百年代の初、彼法顯三藏は印度より歸途爪哇に寄港し、此に留まること五月、而して彼は「其國外道婆羅門興盛、佛法不足言」といふ。是れに由つて觀れば四百年代の初には婆羅門敎既に此に渡來したことは疑ない。而して佛法は言ふに足らずとは、佛敎の絕無なるの義ではなく、多少の佛敎の傳來するものあつても、婆羅門敎に比しては其勢力の極めて微々たることを意味するものと思はる。乃ち同島の佛敎は遲くも紀元前四百年以前、既に何人かによつて輸入せられたことは疑ない。而して印度人は元來平和の國民であつて他國を侵略したことのないものであるから、彼等

が瓜哇に移住し來つたのも、恐らく通商貿易の目的であつたのに相違ない。で當時果して印度人の王國が建設せられて居たか否は明かならぬが、婆羅門敎が盛に行はれて居たとすれば、其移住民も可なりに多かつたことは疑なからう。而して兩晉以後唐時代に至つては印度と南海諸島との間の往來も極めて頻繁となつたことは明瞭なる事實であるから、次第に文化の遙かに優越した印度人の勢力も瓜哇に普及するに至つたものであらう。支那の正史に據れば、支那と瓜哇との交通は劉宋の元嘉十二年から始まる。此年には瓜哇の國王師黎婆達陀阿羅跋摩なるものが使を遣はし表を奉つた。而して其表は「宋國大主大吉天子足下、敬禮一切種智、安穩天人師、降伏四魔、成等正覺、轉尊法輪、度脫衆生、敎化已周、入于涅槃、舍利流布起無量塔、衆寶莊嚴如須彌山、經法流布如日照明、無量淨僧猶如列宿」等とあり、其終には「今遣使主佛大陀婆、副使葛抵、奉宣微誠、稽首敬禮大吉天子足下」云々といふ。（宋書卷九十七）此國王や正使の名から見れば、彼等は何れも印度人か印度系の人らしい。若し果して然りとせば印度人は既に此時には瓜哇に其國を建てゝ居たことも疑いなからう而して元嘉十二年といへば法顯の同島に寄港したときからは僅かに二十餘年の後に過ぎない。所が此表文を一讀すれは當時國王の佛敎信者であつたことも疑ないやうである。若しさうでないとしたらば何を以て支那の佛敎的大國なることを稱賛し「悉以茲水普飲一切、我雖在遠、亦霑靈潤」等といふべきであらう。是れに由つて之を觀れば法顯の「婆羅門興盛にして佛法は言ふに足らず」といふのと大に其趣を異にするやうである。是れ或は法顯の所謂闍婆とは今のマストラのことであつて、之より以前瓜哇國王が何等かの事情によつて佛敎信者となつたのではなからうか。兎に角紀元四百年

代の前半には佛教既に瓜哇に行はれたことは明瞭である。

余輩の此推論を助くべき事情は當時にもある。梁僧傳卷三に據ると劉宋時代支那に渡來した譯經僧の求那跋摩なるものは、元と罽賓國の出であるが、壯年既に師子國に至り、更らに轉じて闍婆國に渡つた。闍婆國の王母夙に彼に歸依し受戒し、王に勸め同じく戒を受けしめた。其の後王は屢跋摩の神力を見、遂に家を出で道を修せんとも考へたが、國民の懇請により王位を棄つることを思止まつたが、國民をして王の三願を成就せしむることを諾せしめた。所謂三願とは「一願凡所王境、同奉和上、二願盡所治內一切斷殺、三願所有儲財賑給貧病」といふのであつて、「於是一國皆從受戒」に至つた。王は後に跋摩の爲めに精舍を立て、「導化之聲播於遐邇、隣國聞風皆遣使要請」ともいふ。斯くして跋摩の聲譽は支那にまで傳はつたものと見え、元嘉の元年九月(紀元後四二四年)には京師の沙門慧觀慧聰等文帝に啓し跋摩を迎請せんことを乞ふた。是に於て文帝使をして書を跋摩幷びに闍婆國王婆多伽等に致し、跋摩の支那に來らんことを求めた。跋摩の支那に來たのは何年か確かには判らぬが、恐らく元嘉元年の末か二年の頃であらう。兎に角元嘉の元年に彼の尙ほ闍婆に在つたことは疑ない。而して彼が闍婆の一國をして佛教に化せしめたのはそれ以前のことであるから四百年代の初には闍婆の既に佛教國となつて居たことは秋毫も疑を容るべき餘地はない。

次に瓜哇に於ける稍信ずべき傳說によれば、紀元後六〇三年(瓜哇紀元五二五年) Kuj'rat (卽ちGujarat) 王は其國の早晚滅すべきことを豫言せられたので、王子を瓜哇に送つた。王子は五千の從者と共に船に乘じ、遂に瓜哇島の中央マタラム地方に上陸した。彼此に一國を建てんとしたが、

尙ほ其從者の足らざるを見、本國に使を派し、更らに多數の人民を送らんことを請ひ、本國王は二千人を追送した。瓜哇は此時よりして王國として認められ、本國グヂャラートや其他の諸國と海上貿易を行ひ、國運の隆盛を來したといふ。而してラッフルス氏等は此時金石の工匠技術家も印度より渡來し、彼千佛寺の如き亦此等技術家の手によつて成れるものなるべしといふ。此傳說は歷史的に頗る可能である。元來五百年代の中葉西方印度には彼 Chalukya 王系なるものが勃興し、其 Pulikesin 一世幷びに二世の時代には殆んど破竹の勢を以て其四隣を併呑した。西域記に「國養勇士、有數百人、每將決戰、飲酒酣醉、一人推鋒。万夫挫銳」といひ、又「復飼暴象、凡數百頭、群馳蹈蹉前無堅敵」ともいひ、王は常に此象を恃み鄰國を輕陵したともある。其 Gujarât が征服せられたのはプリケーシン二世の卽位紀元後六〇八年以後のことであるが、一世時代でも四隣の形勢既に累卵の如く、何時國家の滅亡を來すやも計られなかつたので、グヂャラートの王は王子をして瓜哇を開拓し、豫め其遁場所を造らしめたものとも思はれる。但是れが瓜哇に於ける印度王國建設の初をなしたものでない事は、既に二百年以前元嘉の頃宋國に使節を派遣したものゝあつたによつても判るが Gujarât 王子がマタラーンに來たといふ傳說が眞であるとすれば、彼は西方瓜哇に王となり、此は中央瓜哇に建國したものかも知れぬ。而してマタラーンに國を建てたとすれば、ラッフルス氏等の想像する如く千佛寺の如きも其王子若くは其子孫によつて設計せられたとするのも必らずしも理由ないことではない。尙ほ Fergusson 氏等は一層此推定を傍證するものとして、スマトラの Menankabn に發見せられた石碑を擧ぐるのである此石碑は約五十年後の紀元六五六年に自から佛敎

信者と稱する Prathama（第一位の義、最勝瓜哇を意味するものと解せらる）の大王 Adiraja Âdityadharma と稱するものゝ造る所で、其中には「大七層毗訶羅を建立して佛に供養す」ることを說く。で是れは年代に於て少しく後くれて居るが、前と同一事實に關するものならば疑なき事とし、此に七層毗訶羅とは卽ち彼千佛寺を指示するものとするのである。然らば何が故に中央瓜哇に其碑を建てずして、之と遠く相距るスマトラに立てたか、Fergusson 氏は之を解していふ、阿育王の碑も其中央の Bihâr 地方には反つて存せずして、遠く之と相離れた Gandhâra, Surâstra, Mysore, Orissa 抔にあるではないか。中央では王の功業も既に一般に認められて居るから、更らに碑を建てゝ之を告示する要はない。遠距離邊境の民にこそ牌を造り、其赫々たる功勳を示す必要があるからである。是れ亦一理あることである。併しながら余輩は此說に就き全然信を措く譯には行かない。先づ第一には此にいふ Âdityadharma と稱するものが果してグジャラート王子と同一人であるか否や不明であるのみならず、此碑文には「七層の毗訶羅」とある。毗訶羅とは僧の住する寺院であつて塔ではない。而して千佛寺は前にいつた如く本來塔であつて、僧侶の住すべき所は秋毫もないのである後世では俗間誤つて之を寺とはいつて居るが、當時の印度人が vihâra と stûpa とを混同すべき筈はなからう。特に王の碑文中に之を誤る如きは吾人の容易に想像し得ない所である。當時は印度內地に於ても騷亂の可なり烈しい時代であつたから何處かの印度人が遁れ來つてスマトラにも國を建てたものがないとも限らぬ。唯七層毘訶羅とあるのみを以て此兩者を連結せしめんとするのは、尙ほ論據の極めて薄弱なるを感ずるのである。次に Gujarât 王子移住の傳說に關しても、ラッセン氏の

既に疑ふが如く、ラッフルス氏の歴史によると印度東海岸 Kalinga 王が二萬の眷屬と共に爪哇に移住したといふ傳説もある。カリンガは東 Chalukya 王國と境を接して居たので、是れ亦其勢力を恐れ此に移住し來つたと考ふるも可能である。で其移住し來つたものゝ果して Gujarât であるか Kalinga であるか嚴密には判らぬのである。第三には其建築の樣式である。若し Gujarât 地方から印度技術家が渡來したとすれば、彼等の造る所も自から西方印度建築彫刻の樣式を繼承すべく、又 Kalinga より來たとすれば東方印度のそれに類すべきは當然である。然らば千佛寺の樣式は如何といふに、是れ亦談必らずしも容易ではない。Fergusson 氏は前にも一言した如く千佛寺の彫刻や建築樣式を以て西印度のそれを繼承したものといふ。が Foucher 氏は此塔の一般設計に於ても、又其壁面彫刻に於ても、其思想は揵陀羅より來たものではなく、南印度からであつて、アマラヴチーが其直接の粉本であるとなすのである。勿論千佛寺建築と同形式のものは、印度にあつては未だ一も發見せられないのであるから、其何れの説の果して是なるかは、今容易に斷言し難いが、當時に於ける他の建築抔を比較研究すれば寧ろ後者の説の眞に近いものではなからうかと思ふ。

斯く Gujarât 王子の傳説も實は甚だ曖昧なものであて、史料としては尙ほ頗る不完全たるを免れぬ。が四百年代以後六百年代に亘り、佛教が次第に隆盛となつたことは疑なき事實のやうである。前のスマトラに於ける七層毗訶羅を造つたといふ碑文も、亦之を傍證するに足るのであるが、尙ほ此に一の注意すべきことがある。義淨の求法高僧傳中會寧律師の傳に、「會寧律師……爰以麟德年中、伏錫南海、汎海至訶陵州、停住三載、遂共訶陵國多聞僧若那跋陀羅、於阿笈摩經內譯出如來涅槃焚

身之事、斯與大乘涅槃頗不相涉、……會寧既譯阿笈本、遂令小僧運期、奉表賫經、還至交府、馳驛京兆、奏上闕庭、蕚使未聞流布東憂」とある。是れが卽ち泥洹經後分なるものである。して見ると麟德年間(卽ち西曆六六四、五年)には諸種の佛敎經典も同島に傳來したことが判る。支那の正史には彼元嘉年代以後瓜哇の朝貢も中絶したとあるが唐代には彼此の來往頗る頻繁であつたらしい。で貞觀十四年(舊唐書)にも朝貢し、大曆年間には三度使を遣はしたといひ、(新唐書)其後元和の十年十三年にも來て居る。特に最後の二回には僧祇(Saingitam)男僧祇女と稱し、男女の樂隊をも献じて居る。會寧の彼に至つたのも怪しむに足らず、又此六七百年代は全島佛敎の全盛時代であつたらしい。が併し Djokia の西國 Kadu には紀元後七三二年の銘を有するリンガ(婆羅門敎の陰陽佛)の遺物が發見せられ、同七七九年其附近の Ka'assan

には多羅に捧げられた寺院が建立せられて居る。是れに由つて見ると七百年代には支那に於けると同じく婆羅門敎若しくは婆羅門佛敎習合の密敎が入來つたものゝやうである。爾來印度に於けると同じく瓜哇の佛敎も次第に衰微し、終に傳說によると九一四年には國王の Deva Kusuma が其四男一女をカリンガに送り、此に婆羅門の敎育を受けしめ、其歸朝の際には又印度から諸種の範圍に於ける技術家を伴ひ來り、全國を婆羅門敎に風靡せしめたといふ。佛敎信仰は之よりして同島に根絶したのである。

以上陳べ來つた斷片的の事實を綜合し考ふれば瓜哇の佛敎は紀元後五世紀に起り、七世紀の中葉最も隆盛となり、八世紀の頃より婆羅門次第に混入し、九世紀の終から十世紀の初には既に同島の佛敎も全然婆羅門敎によつて征服せらるゝに至つたものらしい。而して千佛寺の如きは、佛敎信仰

の最も盛大なる時にあらざれば、到底成し得ない所であるから、大體に於いて、七世紀の後半から八世紀の初に成れりとなすのは、當らずといへども遠からざるものであらうと思ふ。而して此結論は彫刻の樣式から考へても、大なる差支はないやうである。

(三) 彫刻樣式

印度に於ける窣堵波の制は、時代により場所により次第に變遷し、覆鉢式より支那や我邦のそれの如く重層式に至る迄、其變化の迹を辿り得るのであるが、瓜哇千佛寺の如く、塔の上に更らに塔を重ねたやうなものは絶えて見ざる所である。で果して是れが西方印度より傳來したものか、將た南方佛教よりしたかは容易に判斷し得ない、のみならず其何れよりして傳來しても、瓜哇の建築家が特に創意を出し、唯舊來の制を其儘因襲したのでないことは明かである。但此千佛寺と前後して造られたといふ他の寺院や、又其彫刻中に顯はれた殿堂の形式を見れば、是れ亦勿論印度のそれと全然同一ではないが、其最も近い例を印度に求むれば、彼紀元後七百年代に成れりと稱するマドラス地方の Mâmallapuram のそれであらうと思ふ。此點からして余輩は Fergusson 氏の西印渡來說よりも、寧ろ Foucher 氏の南印說に左袒したいのである。而して年代に於ても正しく彼と相接續するものゝ如く感ずる。

更らに其彫刻に就いて之を考うるに、其中印に源を發した翹多式の系統に屬するものたるは一見疑ない事實である。其衣服の薄くして、身體輪廓の透視し得らるゝ如き特徵は、此にも著しく顯はれて居る。のみならず其手法亦頗る纖細にして、其石材の可なり粗質なるに關はらず、人物生動の趣も明らかに看取せられ、未だ著しく形式的デカ

ダンの傾向を帶びない。是れ亦吾人の期も注意を要する所である。勿論全長一哩にも涉る彫刻であるから、作者も一樣でなく、其間多少の巧拙のあることは已むを得ないが、其中の上乘なるものを取つて之を彼アジャンターに於ける末期の彫像に比すれば、吾人は寧ろ千佛寺のそれの優れるとも決して劣れるものにあらざるを斷言したいのである。

尙ほ一の此に余輩の注意しなければならぬのは其壁面に於ける浮彫と、上段の小窣堵波内に安置せらるゝ佛像との間に於ける製作の相違なることである。壁面の彫像を以て、若し直ちに印度彫像の歷史中に割込ましむることが出來るならば、七世紀前後の作とするのが最も穩當であらうと思ふ併し一國の藝術が他國に傳播するに當つては、其本國に於ては既に幾分の變遷を經た後に於ても、尙ほ其輸入地に於ては古代の舊法を守ることもな

いではない。例之へば支那北魏の佛像形式が、朝鮮を通じ我邦に輸入せらるゝや、支那にあつては隋唐の頃既に幾分變化したるにも關はらず、我邦に於ては尙ほ大體舊法を採つて居たやうな譯である。印度と爪哇との關係は、我邦と支那との關係よりも幾分直接であつたらうから、其間の年代の差違に於ても斯く甚しくなかつたかも知れぬが併し其最初傳來した手法が比較的後世迄持續せらるべき可能性はある。だから印度本國の美術史上では七世紀の前半若くはそれ以前の作に相當するものでも、爪哇では或は七世紀の後半若くは八世紀の初頃に造られたとするのは必らずしも不都合でないのみならず、寧ろ斯く考ふるの穩當なるを覺ゆるのである。所で彼上段窣堵波内の佛像に至つては、何れも壁間のそれよりも更らに一層優秀なる製作であつて、之を以て翌多最盛期の作と認めて敢て不可ないものである。且つ壁面の彫像は前

にも一言した如く全部ラヴ石材を用ひてあるが、此等佛像は總べてラヴ石ではない。此等の點から想像すれば、或は此等彫像は早く印度本國から輸入し來つたものか、或は石材と共に印度技術家を招聘し、千佛寺建築以前に造らしめたものではなからうかとも思はれる。而して其大さに於ても、又其印相に於ても相同じい既成品が、當時印度に斯く多數存在して居たとも考へられぬから、何れにしても特に之を製作せしめたものに相違ない。若し壁面の浮彫と同時に製作せられたとすれば、其製作の上に斯かる著しい相違が生ずる筈もなからう。で假令ひ彼小佛像が印度に製作せられたとしても、將た印度の技術家を聘して瓜哇に作らしめたとしても、兎に角彼等が壁面の浮彫と同時のものではなく、少くとも其間に數百年の星月を隔つることを推測しなければならぬ。若し果して然りとすれば彼四百年代、宋の元嘉の頃に勃興し、支那に使節を派遣した印度系の、而も佛教的信仰を有したと思はるゝ、師黎婆達陀阿羅跋摩王か、若くは跋摩によつて佛教に化せられた婆多伽王（若しそれが前と同一人でないとすれば）か、或は此等國王の子孫の、何等かの目的を以つて此等佛像を印度に若くは瓜哇に製作せしめたものではなからうか。而して此等の佛像が既に存在して居たので、六百年代更に印度系の佛教王が之を利用し、此に此宏大なる塔を造るに至つたものとも想像せられ得る。尙ほ最上層の塔の下に未完成の佛像が埋藏せられ居るのも、或は當時製作に着手し、何等か事故によつて未完成に殘つて居たのを其儘に此に收藏したのではなからうか。若し六百年或は七百年代塔製作と同時此等の彫像が成れるものとすれば、特に未完成のものを容るべき筈はない。

以上論じ來る所をして大なる誤なしとすれば、瓜哇の千佛寺彫像は普通世間一般の學者が思惟す

るよりも遙かに古いものであつて、其塔の建築は七世紀前後の頃であつたとしても、其中に安置せられた佛像は既に五世紀の前半遲くも六世紀の初頃迄に製作せられたものといはなければならぬ。而して吾人は斯く考へて始めて其佛像樣式の變化を說明し得る如く感ずる。若し又果して然りとすれば、假令ひ其形相は千篇一律で變化に乏しいとはいふものゝ、印度に於ても翹多最盛期の優秀なる作品の斯く多數存在する所はないので、爪哇千佛寺は實に此點からして翹多期作品の世界に於ける殆んど唯一無二の博物館であるといつても差支ないのである。

此世界的一大博物館にして、又爪哇唯一の佛敎的大建築も、同島佛敎の回敎によつて征服せられて以來、更に人の顧る所とならなかつたのみならず、何時しか砂塵の埋沒する所となり、殆んど地上其跡を滅し了つた。千六百年代和蘭人の此に來つてよりも、彼等は一意爪哇人の膏血を絞り、其本國を富ますことをのみ念願し、爪哇の開發、將た文化の進步抔といふことは秋毫彼等の眼中になかつた。一八一一年爪哇島に一時英領に歸してから、英國の曾て生じたる殖民地政治家の一鬼才たるラッフルス氏が太守として此に來り、過去二百年間和蘭人の惡政を根本的に改善せんと努めた唯此點よりして之をいつても、ラッフルス氏の其住地に滯留したのは僅かに五年の短日月（一八一一—一五年）に過ぎなかつたが、彼の名は爪哇人の永久に忘るべからざるものである。のみならず彼は其多忙の際、尙ほ爪哇に於ける過去の藝術的遺跡を一世に顯彰し、之を永く未來に保存せんことを怠らなかつた。千佛寺は一八一四年彼が二百人の人夫を使役し四十五日の間に全部發掘せしめた所であり、發掘後は尙ほ之を測量し、圖取をなし、之を世に紹介した。發掘以前にあつては其近

村の住民すらも、此寺塔に關する何等の智識も、何等の傳說をも有せなかつたといふ。千佛寺の研究は實に之から始まつたのである。後の千佛寺を說くもの亦實に此一大恩人たるラッフルス氏の名を忘れてはならぬ。其後和蘭の考古學者や佛敎學者も、或は影寫をなし、或は歷史的美術的研究の論文著書を出版するものも尠からぬが、唯余輩の遺憾に堪えざるは、今に至る迄其保存の法の殆んど全く講ぜられざることである。勿論斯かる大建築であるから、之を永久に保存するは容易の業でないが、瓜哇の如く雨量の多く、植物の繁茂する土地にあつては、之を自然の儘に放任するならば忽ちにして之を破損する恐があるのである。今日にあつても既に地盤の傾き、壁の將さに墜落せんとするもの少しとせぬ。のみならず日蔭の處には鮮苔蒸して其建築の生命とする彫刻を毀損するもの亦頗る多い。其僅かに一石の彫像にすら、巨萬の財を以て購ひ取らんとする米人すらもありとか聞く、和蘭政廳の殆んど顧みざる如きは實に遺憾の太甚しきものといはなければならぬ。

六

二月五日早朝再び自動車を驅つて千佛寺以外の舊蹟を歷訪した。ジョフジアからソロに至る間、ブランバナン地方附近には千佛寺と稍後れて造られた幾多の遺蹟がある。其主なるものは Brambanan の Loro-Djonggrang 寺、Kalassan の Kali Bening 寺、Sowoe 寺 Sari 寺、又千佛寺より遠からざる Mendoet 寺、Pawon 寺等である。併し此等の多くは婆羅門敎に屬し、其規模亦固より千佛寺に比すべからざるのみならず、破壞の度亦彼よりも一層太甚しく、現に印度より技師を聘し修繕しつゝあるのもあるから、修繕の後には或は舊觀に復するに至るかも知れぬが、大體からいへば特に言ふ

に足るものはない。併し又部分的に之を觀察すれば、時には千佛寺の如くではないが、頗る賞讃に値するものがないではない。で今は其中の最も主なるもの二三に就き之を略述して置かう。

第一に說くべきは Mendoet 寺である。是れは千佛寺を去る二哩半程、森の內に存する一寺院である。一八三五年和蘭人ハルトマン氏によつて偶然密林中に發見せられたものである。建築は元と三層より成り、四十五呎方形の基礎の上に高さ約七十呎に達する。其各層の周圍には小塔を造ること、宛も千佛寺に於けるが如く、最下層には其數二十四、中層には十六、上層には八。其廻廊の壁面には浮彫を以て諸種の天人佛菩薩の像を顯はしたものゝやうである。Mendoet 寺は斯く規模の極めて小なる上に其建築に於ても殊に注意するに足るものもないのであるが、其中に安置せらるゝ三種の彫像は爪哇彫像に於ける特筆すべきものであらう。中央の像は倚坐して說法の印を結んだ佛像で、其製作はアジャンター末期のそれと極めて相似て居る。而して稍多期彫像の特色も亦能く此に見るを得る。其左右には菩薩聲聞の像があり、一足を屈し、一足を下に垂れた倚像である。其製作亦甚だ優秀なるものである。土人は此像に就いて中央のを Kosoumi 王とし、其左右を其妃と女とを顯はしたものといふが、固より信ずに足らざるのである。

次に一言すべきは Tjandi Sewoe 卽ち千寺である。ラッフルス氏は十一世紀の建立に係るものと稱するが、要するに千佛寺の構造を平面上に模したものである。先づ中央に十字形の建築がある。方四十五呎の室を圍み、其周圍に四個の房が造られ、其何れよりしても中央の室に達するを得るのである。而して此中央の建築の周圍には幾多の小堂が、或は近く或は遠く、四重に方形をなして整

列する。其數總べて二百四十といふ千寺の名は蓋し之から起つたのである。其中央より第一列は直ちに中堂の基礎に接し、各邊八個づ　計二十八堂が造らる　小堂は何れも方十一呎高十八呎のものである。第二列は之を去ること三十五呎、堂の數四十四、四邊各十二。第三列は第二列を去る稍遠く東西兩邊には七十二呎、南北には百二呎、第四列は之と直ちに相接し背合に造られてある。其數計百〇六個である。此等の小堂並に中央の堂には何れも元と佛像が安置せられてあつたのであらうが、今其中存するものは僅かに二十五に過ぎぬ。尙ほ各列建築の間の空地の、行道として用ひられたことは千佛寺に於けると同じく、其全長二千呎にも亙るといふ。又其四面の中央よりして何れも中央の本堂に達し得らるゝことも千佛寺と異ならぬ。千寺の名既に千佛寺の形を模したことを示すものであらう。して見れば是れも亦寺とはいふものゝ實は塔であるといはなければならぬ。此寺も一八六七年メラピ山噴火の際に於ける地震によつて破壞せられ、今や何れも毀損せざるはない。

以上二者は佛敎的建築であるが、婆羅門敎建築の代表者として此に Brambanan の Loro Djong-grang を擧げなければならぬ。此建築はブランバナン地方に於ける諸種遺跡の中最も大なるものである。Loroとは女(神)の義、ジョングランは濕婆神の妃 Durga 又は Parvati のことであるといふ此建築の中央には約方三百六十呎の地を劃し、其東西兩邊に相駢んで三個の殿堂を造り、南北兩面には各一個を建て外に中央の一堂がある。今は僅かに其兩邊の三個、東邊の中央一個とが存するのみである。而して此等殿堂内には梵天、濕婆、ヴヰシス乃至日天月天等の像を安置する。中央の堂には前に述べた濕婆の妃ジョングランの像を祭る。是が其名の由つて起る所である。殿堂は大小多少

異なつて居るが、何れも入口の一室と四室とより成り、中央の一室最も大にして、約方二十呎の廣を有する。材料は他の建築と同じくラヴの切石を積み成れるものであるが、其周圍表面には頗る精巧なる浮彫を以てし、諸神の像を顯はす。中には宛も佛教寺院の壁面に佛傳や本生譚を刻すると同じく、此には羅摩物語を連續彫鐫するものもある。而して此等浮彫の中で普通西人が其播圖の稍相似た所から「三美人」(Three graces)と名づくる牧女の圖がある。是れが最も有名なもので、其優美なる女人の像を顯出すに於て頗る成功したものである。元來此建築は十世紀前後に成れるものといはるゝが、恐らく當時の彫像としては全印度を通じても最も優秀なる製作といつて差支なからう。此殿堂に安置せらるゝ神像の底部には穴があり、石や煉瓦を以て之を蔽うてあるが、其穴の底には石棺が埋められてあり、其内には人骨や諸種の金銀

銅器や印度の貨幣抔が收められ、或は土器や裝飾品の存するのもある。此等は最近之を修繕するに當り始めて發見せられた所であるといふ。して見ると是れも本來は神殿ではなくして、記念塔であつたらしく思はれる。尙ほ此殿堂の中央區劃の四周には、三重の列をなして總計百五十七個の小塔が造られてある。此等は何れも其形狀大小相同じく、中に方形の一室があり、之に入口が附せられてあるのみである。而して又何れも外方に面して居る。更に其小塔の外面には周壁が設けられ、各邊約七百二十呎の方形をなす。

其他の建築に於ても前に述べた如く部分的には可なり見るべきものもないではないが、先づ大同小異で、特に注意に價すべきものもないから、今は一切之を略することゝする。

余輩は瓜哇上陸後數日を費して中部瓜哇に於ける最大最美の建築千佛寺を始めとし、其主なるも

のは、佛教的と婆羅門教的とを論せず、略之を一見し得たから、二月六日ジャグジアを出發し、再びバダビアに歸り、七日午後四時タンジョン・プリオク出帆の汽船に乘じ、極めて短時日ではあつたが、最も愉快なる旅行の後、前と同一航路を通じ同九日の早朝シンガポールに歸還したのである。

西印度ナーシックに於けるゴータミープトラ窟に就て（上）

文學士　澤村專太郎

一

西印度に於けるナーシック Nâsik 邑の西南五哩を隔てた地點に三個の丘陵が聳えてゐる。是等は所謂トリムバク連岡 Trimbak の一端を成すもので、往昔この三丘はトリラシミ Triraśmi と呼ばれてゐた。トリラシミのうち、其一個に於ける中腹には約四十四個から成立する一群の石窟がある是れが卽ちナーシック石窟群として世に知られてゐるもので、此地方に於ては之をパーヌデゥ・レーナ Pâṇḍu Leṇa と呼んでゐる。固より是等の石窟群はアジャンター Ajanṭi 及びエルラ Elura 等のそれには比肩するに足らぬけれど、多數の銘文を存するのみならず、石窟の建築的樣式に於ても研